

中国出土資料学会会報

2022年12月 3日 第75号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

◆目次◆

2022年度第1回大会（総77回）報告.....	1
新刊紹介：日本中国語学会編『中国語学辞典』（岩波書店、2022年10月）	
宮島 和也（成蹊大学法学部）.....	3
新刊紹介：裘錫圭著、稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範訳『漢字学講義』（東方書店、2022年6月）	
野原 将揮（京都大学人文科学研究所）.....	4
学会彙報.....	5

《2022年度第1回大会（総77回）報告》：2022年7月9日（土）オンライン開催

（I）漢初の虎符と列侯就国令

邊見 統（学習院大学・非常勤講師）

漢代には郡国の兵を発する際に虎符が用いられた。すなわち、皇帝のもとにある虎符と郡国の虎符とを合わせることにより、郡国の兵を発することが認められたのである。『史記』卷10 孝文本紀では文帝2年（前178）に郡国の守相との間に虎符を作成したとされるが、それ以前にも虎符が存在したことが史料上に見える。また、伝世品や出土文物にも虎符が見られ、漢初のものと考えられる列侯国の虎符も確認されている。しかし列侯国の虎符は史料上に確認できず、また漢代の虎符を扱った研究においても、文帝2年以前から虎符が存在したことには言及されるが、列侯国の虎符は注目されてこなかった。一方で漢初には高祖功臣が政治的影響力を有し、大きな功績を挙げた者は列侯に封建されており、漢初の列侯国に虎符が存在したこととの関連が窺われる。そこで本報告では漢初の列侯国に虎符が存在し、その後は確認できないことに注目し、戦国秦から漢代にかけての虎符について考察した。

戦国秦から漢代にかけて虎符には変化が見られる。銘文は戦国秦から漢代へと時代が降るにつれて簡略化されていった。さらに虎符の背の部分の文字は、初め虎符の両半それぞれに刻まれたが、後には1字が両半にまたがって刻まれた。現在、確認できる列侯国の虎符には堂陽侯虎符・安国侯

虎符・臨袁侯虎符があり、これらは上述の虎符の変遷においては統一秦の虎符と前漢半ば以降の郡国の虎符の中間に位置する。そして堂陽侯（孫赤）・安国侯（王陵）・臨袁侯（戚鯁）はいずれも高祖期に封建された。よって、上記の列侯国の虎符は前漢初期のものと考えられる。

以上のように漢初にも虎符に変遷が見られる。文帝2年とその翌年の列侯就国令により多くの列侯が就国したが、彼らの多くは高祖功臣である。文帝と諸侯王・高祖功臣が政治的に緊張関係にあるなかで、文帝2年に軍事的な経験を有する列侯に就国を命じるに際して兵権の所在が問題となり、郡国の守相との間に虎符作成が行われ、列侯国の虎符が廃止されたと推測される。

（Ⅱ）北周侍衛の起家基準—韋孝寛一族の墓誌を中心に—

会田 大輔（明治大学等兼任講師）

北魏では5c末の孝文帝期に中国化政策が行われた。しかし、その反動で華北は動乱状態に陥り、北魏は534年に東西に分裂してしまった。このうち中国化路線に反発した西魏（535～556）・北周（557～581）は、北族重視路線を選び、復古政策を展開し、官制面では『周礼』に基づく六官制を採用した。この六官制のうち、皇帝の護衛・侍従を職掌とする侍衛（宮伯・諸侍）には遊牧官制の要素が存在しており、北周では出世コースの一つとなっていた。特に諸侍は功臣子弟の起家官としても機能していた。しかし、北魏前期の北族の功臣子弟が原則として内朝官（遊牧由来の側近官）から起家したのに対し、北周の侍衛起家は功臣子弟の一部に留まっていた。

北周の侍衛の起家基準については、文献史料からうかがい知ることができなかった。ところが、その手掛りが近年正式に公表された韋孝寛一族の墓誌に存在していたのである。そこで本報告では、韋孝寛一族の墓誌の分析を糸口に、侍衛で起家した群臣子弟の経歴を再調査し、侍衛起家の基準を解明していきたい。

韋孝寛（509～580）は西魏・北周に仕えた漢人豪族で、東魏の高歡の侵攻を防いだ名将として知られている。韋孝寛一族の墓誌を分析したところ、韋孝寛の息子のうち、侍衛で起家した者は韋孝寛の嫡出子であった。同様に諸侍起家した人物の嫡庶の別を確認した所、半数近くが世子（後継ぎ）であり、嫡出子と確認できた事例も六割弱に及んだ。嫡庶不明が四割に及んでいることから、嫡庶の別があったとまでは断定できないものの、諸侍起家の多くが嫡出子（特に世子）であったことは間違いない。諸侍起家における世子の割合の高さから、皇帝の護衛・侍従をつとめる諸侍起家が他の起家よりも重んじられており、元勳・功臣との紐帯強化の意味が含まれていた可能性が考えられる。

（Ⅲ）征服軍の撤退—里耶秦簡よりみた占領統治の展開

宮宅 潔（京都大学人文科学研究所）

現在の里耶鎮の一带を占領し、そこに遷陵県を設置した後、秦の占領軍はこの新領土から徐々に撤収した。占領のごく初期には、遷陵県内に司馬・卒長・邦侯といった軍事指揮官が駐屯しており、「奔命」を率いた校長や尉の存在も確かめられる。彼らの多くが、遷陵県内の最前線である貳春郷附近にいたようである。その配下にあった兵士は主として南郡の出身者で、洞庭郡から近く、かつ秦による統治の歴史が比較的長い地域の人員が動員されていたことが分かる。だがその後、こ

れら占領軍の姿は遷陵県内では見られなくなる。その間に占領軍が撤収し、遷陵県内に置かれた兵力は防備兵（更戍・冗戍・罰戍など）を中心としたものに置き換えられていったのであろう。新たに配置された防備兵の中には、統一戦争のなかで新たに占領された地域の出身者もいた。占領軍の撤収と兵力の入れ替えは段階的に進められたようで、まずは征服直後、すなわち始皇 25 年頃に、そして始皇 27 年頃にも行われたことが、いくつかの史料から確かめられる。特に始皇 27 年の撤収は大規模なものだったようで、洞庭郡から遷陵県に繰り返し指示が下され、関連する活動が長期にわたり続いたようである。こうした軍の撤収に呼応するかのようには、統治体制にも変化が見られる。占領後、速やかに県が設置されると、そこに送り込まれた官吏によって部局間での文書の遣り取りがなされていたことはもちろん、銭の使用や徭役の徴発も比較的早い段階で行われていた。これに対し、賦税の徴発はやや遅れていたようである。さらには官有労働力を用いた農田耕作や、民間からの穀物買い入れ（「糴」）などは、なかなかスムーズに始まらず、始皇 28 年以降に本格化したことが里耶秦簡から見て取れる。本発表ではこのように、里耶秦簡を時系列に沿って分析することを通じて、軍事的な勝利が征服者による支配にたどり着くまでの道程について、統治制度の展開にも注意しつつ分析を行った。

《新刊紹介》

日本中国語学会編『中国語学辞典』、岩波書店、2022 年 10 月(16,000 円+税)

宮島 和也（成蹊大学法学部）

本書は総勢 180 名以上が執筆・編纂事業に関わった、まさに日本中国語学会の総力を挙げて編纂された辞典である。日本中国語学会の前身である中国語学研究会が編纂した『中国語学事典』（江南書院、1957 年）・『中国語学新辞典』（光生館、1969 年）以来、約 50 年ぶりの刊行となる。

日本における中国語研究は長い歴史と研究蓄積があるが、資料の増加や言語学理論の発展とその影響などに伴い、近年著しい進展を遂げている。その成果を凝縮したものが本書である。最古の文献資料である甲骨文から現代語に到るまで、言語学・中国語学の術語や言語現象、研究対象となる資料とその内容・特徴などについて約 1100 の項目が立てられており、中国語学のほぼ全ての領域をカバーしている。本書の各項目を参照することで、現時点での中国語研究における各領域の厚みと水準を手軽に知ることができるだろう。

本学会との関連について言えば、本書には筆者も含め本学会会員の執筆した項目も少なくなく、「戦国文字」「『説文解字』」「『春秋左氏伝』」「清華大学蔵戦国竹簡」といった、文字あるいは文字学に関する項目や、伝世文献・出土資料に関する項目が多数立てられている。各項目は基本的に語学研究の観点から書かれているが、本学会会員各位の研究に資する記述も数多くあるだろう。また、出土資料を読むにあたっては音韻学や上古中国語の文法などに関する知識が必須であるが、本書の簡にして要を得た解説(特に「上古中国語」は必読と言える)は、語学以外を専門とする方にも有用であろう。

《新刊紹介》

裘錫圭著、稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範訳『漢字学講義』（東方学術翻訳叢書）東方書店、2022年6月（6,300円＋税）

野原 将揮（京都大学人文科学研究所）

一般的に子どもはひらがな、カタカナを学んだ後に、漢字に触れはじめる。子どもたちを観察していると、思いのほか多くの子どもがこの煩雑で記憶するのに負担のある文字に対して興味を持っているようである。習いたての漢字の使い方も手慣れたもので、「歯歯のひ {母の日}」、「田べる {食べる}」等と自由に当て字を使いこなしており、漢字に対する認知と漢字の言語表記システムとしての機能に驚かされる。漢字に向けられる強い関心は一部の大人にとっても同様であり、ここしばらくは漢字ブームとも言われるような風潮が見られる。漢字の構造の複雑さや異体字に魅了される人もあれば、漢字の字源に興味を抱く人もある。またいわゆる漢字文化圏というやや広い視座から漢字を俯瞰する人もあるだろうし、漢字の教育に日々取り組んでいる熱心な教育者も少なくない。しかしながら、漢字ブームが盛り上がるにもなって漢字をめぐる俗説が彼方此方で産み出され、その正否をめぐるインターネット上では議論百出、甲論乙駁といった状況を上回るカオスな状態に陥ることもしばしばである。いわゆる俗説と言われるものは、言語表記システムにすぎない漢字に過度な意味を期待するために創り出されるわけであるが、俗説であれ何であれ、人々が漢字一つに様々なストーリーを連想するということは、漢字の文字としての可能性や魅力の豊かさを却って示しているとも言えよう。占いの類であろうが、いわゆるキラキラネームであろうが、漢字が様々な面で活用されるのは単音文字に比べて漢字が内包する（もしくは内包することを期待される）情報量が圧倒的に多いからに違いない（本書 p. 71 「射」字に対する『説文』説解のようにこじつけと思しき説も古来よりあるわけで）。そこに漢字の醍醐味があり、多くの人々を魅了し続けているということは事実の一端であろう。一方、学問として少しでも漢字に携わる者としては、悠長なことを言っていられないというのもまた事実である。そして今年、ついに言語表記システムとしての漢字を広くカバーした中国語による専門書の翻訳書が現れた。裘錫圭著、稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範訳『中国漢字学講義』（東方学術翻訳叢書、東方書店）がそれである（以下、本書）。原書は1988年に出版されて以降、何度も版を重ねる裘錫圭氏の『文字学概要』（商務印書館）である。ちなみに当該書の翻訳は早稲田大学中国古籍文化研究所の文字学研究班の成果として（『文字学概要——〔前編〕漢字の誕生とその展開』（2004年）、『文字学概要——〔後編〕漢字の性質とその展開』）すでに世に出ているが、この早稲田版は数に制限があり、いまや入手困難である（訳者は本書と同じ）。

以下、簡単に本書の内容を紹介したい。

第一章「文字形成の過程」では、「文字」とは何であるかということからはじまる。本書の定義では文字＝言語表記システムということである。この点はあまり広く共有されていないが、漢字を学問として扱う上では最も重要な点の一つである。第二章「漢字の性質」では、表意や表音に関わる漢字の性質を扱う。第三章「漢字の形成と発展」では、漢字の起源について、甲骨以前の資料について解説する。半坡遺跡や大汶口文化後期の遺跡から発見された符号（もしくは記号）、殷周時代の青銅器に見える族徽等の紹介から、文字体系が完成する殷代後期までの変遷について議論をす

すめる。また漢字の発展過程における主要な変化として、字体・字形の簡略化と一部の複雑化、象形から非象形への変化——すなわち線條化、また構造上の変化として形声文字の増加等の主要な変化を扱う。一言で簡略化・複雑化と言ってもそのタイプは多様であることがわかる。また字数の変遷に関わる情報も当該章で紹介されており参考になる。第四章「形体の変遷（上）——古文字段階の漢字」、第五章「形体の変遷（下）——隸書・楷書の段階の漢字」では、文字の形体の変化を研究するための文字資料を軸に文字の変化を解説する。具体的な用例が多く挙げられており、変化の豊かさが垣間見られる。第六章「漢字の基本類型の区分」から、三つの章（第七章「表意文字」、第八章「形声文字」、第九章「仮借」）は造字法や用字法、いわゆる六書に関する解説である。第十章「異体字・同形字・同義換読」では、異体字の分類、異なった語を表す同形の文字——すなわち同形字、そしていわゆる日本語の訓読みに似た用法の同義換読について、いくつかの例とともに紹介する。仮借で解決できない場合、同義換読で説明できることも多々あることから、出土文字資料を読み解く上でもやはり重要な用法である。第十一章「文字の分化と合併」では、文字の分化の例としてたとえば「猶」と「猷」のような異体字による役割分担を目的とした分化や意符を加えることで新たな文字を分化させるものなど、様々な文字の分化のメカニズムを詳述する。第十二章「字形と音義の錯綜した関係」では、一つの字が二種類以上の語を表す「一形多音義」やこれとは逆の「一語多形」が生じた要因とその概況についての解説、また「通用字」「通仮字」「通行字」「同源字」のような用語の説明が加えられる。ともすればこういった専門用語をしばしば曖昧に用いてしまうことがあるため参考になる。第十三章「漢字の整理と簡略化」は漢字の統一と簡略化についての歴史的な変遷をシンプルに纏める。

本書には豊富な図版のほか、末尾には語彙索引ではなく文字の索引が付されており、これがなかなか便利である。たとえばいま「辛」を字音索引で引いてみると、62頁とある。そこで62頁を見てみると、「辛」の文字の複雑化（「𠂔」>「𠂔」、**「𠂔」**）についての解説を読むことができるというわけである（図版は本書62頁より）。また漢字のおよそ八割が形声文字であることも手伝ってか、字音索引を見てみると声符を共有する漢字が続けて配列されているため芋づる式に同声符の漢字について知見を得ることができる。たとえば「夾」を引いてみると、226頁に「字形は、二人の人が一人を両脇から挟んで支えている様子を象っています」とあり、更に詳しい解説が続く。「字音索引」に戻ると、「夾」の次に「峽」と「狭（陝）」がある。そこで続けて「狭（陝）」が出てくる327頁を見てみると、「狭」と「陝」の関係について説明が加えられている。また銀雀山『孫子』で「狭」が「陝」に作られているといった情報も加えられており嬉しい。すべての文字について同様の記載があるわけではないが、このように字書的に用いることもできるため重宝される。内容や翻訳については専門家の手に委ねたいと思うが、会員諸氏の皆様にはまずは手にとって読んでもらいたい。日本語で裘錫圭氏の著書を読めるというのは実に意義深いことである。

《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2022年度第1回大会（総77回）が、2022年7月9日（土）にオンラインで開催されました。

○会報委員会より

(1) これまで会報（年2回発行）は国内会員等に対して郵送して参りましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により当面の発送作業が困難なこと、また中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、2020年度からはこれを学会ホームページにおいて公開し、郵送は取りやめることといたします（2020年7月5日開催の2020年度第1回理事会における決定事項）。なお、発行回数や掲載内容等については特段の変更点はございません。会員の皆さまにはたいへんご不便をおかけいたしますが、何とぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなど、引き続き広くお読みいただけるような工夫をして参りたいと思います。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ぜひこの機会にご登録ください。

(2) 2012年7月21日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第46号（2011年3月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年二回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様様、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を停止し、当面下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール（宛先：office@shutsudo.jp）で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD（～.docx または、～.doc）形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されないのであれば、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第27号の締切について

2010年度大会（2011年7月16日開催）および2011年度大会（2012年3月10日開催）にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第27号の投稿締切日は、

2022年12月末日です。ふるってご寄稿下さいますよう、お願い申し上げます。

(3) 『中國出土資料研究』の奥付について

機関誌では、その奥付記載発行日と実際の出版日との間のずれが大きいことに由来する問題が生じておりました。そこで、第20号からはその日付を一致させることになりました。最新第26号の奥付は2022年7月発行となっております。

○事務局より

(1) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、事務局では従来通りの作業が困難になっております。この状況に鑑み、大会案内等紙媒体の送付を当面停止し、学会ウェブサイトとメールでご連絡することといたしました。皆様には大変なご不便をお掛けして誠に恐縮ですが、どうぞお許しいただきますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、
通常会員・準会員 年額4000円
学生会員・海外会員 年額2000円 です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

office@shutsudo.jp